黒髪のホムンクルス

鈴鳴月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒髪のホムンクルス

【Ｎコード】

Ｎ８６５４Ｘ

【作者名】

鈴鳴月

【あらすじ】

中三女子（もりもとわか）森本和歌。

流星群に「死んだ兄に会わせて」と頼んだら願いは叶ったものの神様の都合で転生させられる事になってしまった彼女は、ほんの出来心で呟いてしまった「人間や獣人とか亜人とかモンスター以外で人型だったらいいなー」と言う台詞から人工生命体（ホムンクルス）として転生する事に！

「お兄ちゃんは自力で見つけてください。期限は二十年」なんて細かいようで適当な神様の助けも借りて、和歌は異世界で兄探しをす

る。
「え、変人貴族？何それ私？」
冒険者として異世界を旅する事になった和歌は魔法の使えない保護者に守られながらチートな能力をフル活用。早速兄探しの目的が薄れ始めた和歌に、果たして兄は見つけられるのか？
※基本主人公はチートです。残酷描写は保険。チートやご都合主義が苦手な人はブラウザの戻るボタンを押して下さい。

プロローグ（前書き）

基本月一ほどのゆっくりペースで更新していきます
未熟な文ですが、誤字脱字感想その他お待ちしております

１１／１８
すみません

間違って妖怪町騒動の方の更新をこちらに入れてしまいました

１８は黒髪のホムンクルスではありません

お騒がせしました

プロローグ

１４歳、中学三年生、女子。
森本和歌（もりもとわか）を表すのに、そう多くの言葉はいらない。

全くもって普通中の普通。少し友達は少ないが、逆に言えば和歌にはそれだけしか着目点が無い。
家族構成は父母と死んだ兄と自分だけ。ペットは飼っていない。
ベタベタのお兄ちゃん子だった和歌は、兄が死んだときこそショックのあまり日常生活すらままならないような状態だったが、今は落ち着いている。時々兄のことを思い出して涙を流す、それだけ。

その日は、大きな流星群が見られる日だった。
数少ない友達のうちの一人に流星群を見ようと誘われた和歌は、親に断りを入れてから街で一番高い丘の、更にその頂上にいた。

丘には流星群を一目見ようとかなり多くの人が集まっている。
皆一様に夜空を仰ぎ見ているが、まだ流星群の訪れる気配は無い。
和歌の隣にいた友達は早々に丘に来ていた同じ学校の子の所へ行ってしまい、和歌は一人丘に腰掛けていた。

夏も終わりとは言えまだ暑かった日中に比べて、夜はやはり肌寒い。
そんな所に薄着で来てしまったことを軽く後悔しながら、和歌は大した感慨（かんがい）も無く夜空を眺めた。
元々ここに来たのは誘われたからで、来たくて来たわけではない。

今から帰ってもいいのだけれど、その場合は親への説明が面倒だ。
和歌がそこまで考えた時、不意に夜空を光る筋が横切った。
「流れた！」
誰かがそれを見て叫ぶ。途端に丘の上には黄色い歓声と何かを願っている声が溢れ返った。
「願い事、か」
和歌は、本来流れ星に課せられた役目をようやく思い出しながら言った。
そしてなぜ丘の上にこれだけたくさんの人が集まっているのかも。
「皆、願うために集まっているんだ」
それに気づいた途端、和歌の心の中にふわりと兄の顔が浮かぶ。

和歌の兄は、和歌が小学三年生の夏に死んだ。高校一年生だった。部活の帰り、早く帰らないとと急ぐ自転車で一時停止を無視した挙句（あげく）の、トラックとの接触事故。
直接ぶつかったわけではなく接触だったにもかかわらず、スピードを出しすぎていたことによってバランスを崩し、強く地面にたたきつけられた上に、その勢いに乗って川の堤防に面したガードレールを乗り越え――
――そうして、兄は和歌の元からまるで雪が溶けるように淡く消えてしまった。

もしひとつだけ、願いが叶うならば。
夜空を次々と横切る星を強く見つめながら、和歌は思った。

もしひとつだけ、願いが叶うならば……。

「お兄ちゃんに、会いたい……」

それは今の和歌の全身全霊をかけた願い。

とても辛抱強く、現実的だった和歌は今初めて、何かに“願う”ということをした。

強く、強く。

和歌の想いに応えるかのように、夜空に舞う全ての星が一瞬輝きを強めた。そのうちの一つがだんだん大きくなってくる。

次の瞬間、和歌は胸の中心に灼けるような熱さを感じた。

そして、そのまま和歌の意識は遠ざかっていった。

享年１４歳。森本和歌は、流れ星に打たれて死んだ。

第一話　和歌→ワカ（前書き）

１１／１８
すみません

間違って妖怪町騒動の方の更新をこちらに入れてしまいました

１８は黒髪のホムンクルスではありません

お騒がせしました

第一話　和歌→ワカ

ふと目覚めると、和歌の目の前には小さな男の子がいた。

「起きた？」

「うん、起きた」

和歌にそう聞いてくる男の子に答え、和歌は自分の胸元に手をやった。

「……あれ、痛くない」

私は胸を何かに撃たれて死んだはず。じゃあ痛くないのは何でだろう。と和歌は身を起こして、服を浮かせて胸を見てみる。

そこには、傷の代わりに何とも形容しがたい丸い紋様があった。大きさは手のひらぐらいで、かすかに黒に“光っている”。

和歌はしばらくその紋様について考えた後、答えが出ないと考えるのを放棄した。

そして、目の前にいるいかにも神話の中の神様！みたいな、不安そうな表情をしている男の子に訊く。

「ここどこ。あとこれ何？」

すると、男の子はあからさまにほっとした顔で和歌の質問に答えた。

「えっと、まずここは天国と地獄の狭間の小さな空間です。あとその印は闇の神の“お気に入り”の印。そして君は死んだんだけど……理解できる？て言うか、こんなのに慣れてるの？あんまり驚いてないみたいだけど……」

「ううん、すごく驚いてるよ。私、感情が表に出ないタイプなの。……そっかあ。死んじゃったのか、私」

「そこで納得しちゃうんだ……。普通の人はパニックになるかそれが収まると何でこうなったのかとか言って僕を質問攻めにするんだ

けどな」
「余計なことは考えないに限るよ。何ならしてみようか？質問攻め」
和歌が挑むように軽く男の子の顔を睨(にら)むだけで、すくみ上がるように涙目になった男の子。

「ところで、君は誰なの？」
そんな男の子が何だか可愛らしくなって、和歌はとりあえず歩み寄りのためにそう訊ねてみた。
「えっと……僕は、神なの。神の内の、一応一番トップ。例えばギリシア神話のゼウスとか、日本神話のイザナギとか」
へえ、と心の中では納得しつつも、そう安易に人を信用するのもダメかなと思い立った和歌は、その男の子に少し疑いの目を向けてみた。と、男の子は急に慌てだす。
「え、いや、本当だよ？本当なんだよ？今はこんな六歳ぐらいの男の子の身体してるけど、ほらその気になったら姿とかいくらでも変えられるし……」

老若男女あらゆる姿に変わる男の子。可哀相になって、和歌は疑いの目を解除してあげた。
「うん。君が神様なのはよーく分かった。で、死んだ人って皆そんな最高位の神様と面会出来るの？それとも私が特別なだけ？」
「ていうか本題がそれなんだ。森本和歌さん。君は、僕の部下の“闇の神”にその願いを叶えられた。それで、今ここにいるの」
願い。願い……ねえ。
和歌にはどうも嫌な予感しかしなかった。トラブル襲来！トラブル襲来！と脳内で警告音が鳴り響いている。
「え、願ったでしょ？あの『お兄さんと会いたい』って言う願い」
男の子のその言葉で和歌の中の警報装置が木っ端(こっぱみじん)微塵に吹き飛ん

だ。代わりに脳内を占めるのは兄との幸せな日々。
「行く。今すぐお兄ちゃんの所に行く」
気が付けば和歌は男の子の肩を掴んでゆっさゆっさと前後に揺らしていた。和歌の目の色が変わっている。
「う……うげぇっ！苦しい！放して！説明するから！説明！お兄さんに会えなくなるよ！！」
ぴたり、と静止する和歌。男の子はその隙を利用して和歌の攻撃からすり抜けた。
「えっと……」
「説明して今すぐ迅速に」
「はい」
神すら従わせる和歌のブラコンぶりは最強だった。

「じゃあ説明するね。少し難しい話になるからしっかりついてきて」
「うん、分かった」
和歌が完全に正気に戻ったのを確認してから、男の子はゆっくりと話し始める。
「まず、神々の間には少々厄介なルールがある。ルールといっても一つだけなんだけど、それは“神の力を用いて世界に直接力を及ぼしてはいけない”っていう物。これは神話の中の世界みたいに、人間その他種族が圧倒的な力を持つ神によって好き勝手に蹂躙（じゅうりん）されないため」
男の子はそう言いながら空中に絵を描く。
それは、神様が好き勝手に力を使って動物や人間たちを操作している絵。かなり上手い。
「……で、それを破って神が力を出そうとすると、あらゆる世界……神々の世界ももちろん含めたあらゆる世界に世界が崩壊するほどの厄災が降り注ぐことになっている」
男の子の描いていた絵が動画みたいに動き出す。
空から火の玉が降ってくる図、海が干上がっていく図、力を及ぼ

していた神に落ちる大きな落雷の図。

「でも、そのルールには例外がある」

パチン、と男の子が指を鳴らす。とたんに跡形もなく消え去る絵。

「その例外とは、人やその他種族に与える祝福や試練。これらは神々の世界で一定の手続きを行うことによって、特定の人物または種族にそれらを与えることができる。つまり世界に直接力を及ぼせるってことだね。……ここまでは分かった？」

ふうと一息、男の子が和歌に訊ねてくる。

「うん、理解した。要するに私の願いはその“祝福”の範疇（はんちゅう）に収まりきらなかったから、私をいったんここに呼び寄せたんでしょ？」

和歌をさりげなく気遣っているその台詞に、和歌は平然と答えた。

「うんそうだよ……って、早っ！理解早ぁっ！何？何なの？君って天才か何かなの？！」

男の子の顔が驚愕に変わる。

「いや、お兄ちゃんが死んじゃったせいで小さい頃から大人の小難しい話ばっか聞かされてきたから……こんなのだけは整理できるようになったの」

「ああ……そうですか」

「あとその“君”っていうの嫌だから、和歌って呼んでよ」

「了解。じゃあ話を続けるね。……で、何で君ッ……和歌をここに呼び寄せたかっていうと、和歌のお兄さんがもう輪廻（りんね）の環に乗って転生済みだってことが分かったからなんだ」

「へえ」

「だから、端的に言うと君にはお兄さんの行った異世界で兄探しをしてもらいます」

男の子は、笑顔で和歌にそう言った。

「行く。そして探す。今すぐ探しに行く。今すぐ」
「……決断も早いね。でもちょっと待って、説明はまだ済んでないから最後まで僕の話を聞いて？」
誰が何と言おうとという勢いの和歌をどうどうとなだめて、男の子は話を再開する。

「で、和歌のお兄さんは和歌とは違って普通に転生したから普通に記憶がなくて、和歌のことを見ても和歌だってわからないの」
「私はお兄ちゃんの記憶を戻せばいいんでしょ？」
「そうだよ。だから、和歌にはその世界の生物の記憶を担当している神のところまで行ってもらうことになるんだ」
「行けばいいんだよね」
「いやまあそうなんだけど……」
男の子は渋い顔をした。

「……けど、和歌をその世界に飛ばすためにその神とかその他もろもろのその世界の神に色々と相談してみたところ、世界のルールをねじ曲げないように和歌にはその世界に２０年間いてもらわないといけないって。あとその２０年間で和歌にはお兄さんを世界の中から見つけてもらわないといけないの……」
ごめん、といった顔で男の子は和歌を見た。が、和歌は満々の笑みで言い放つ。
「それだけでお兄ちゃんに会えるなら、安いもの。で、そこまでして私はお兄ちゃんに“会う”だけ？もし見つけられずに２０年たったら、私はどうなるの？」

そんな和歌の様子にほっとした様子で男の子は話を続ける。
「いや、和歌が２０年の期間中にお兄さんに“会えた”なら、和歌はそのままお兄さんと一緒にどこの世界へでも好きなように転生できる。元の世界に戻る場合は、和歌が中学三年生時点のあの流星群

のところで、お兄さんは死んでないって風になって生き返る。」

にこり、とそこで男の子は笑った。

「勿論(もちろん)２０年経って転生しても転生中の記憶はあるし、望みとあらば力も付けよう。でも、“会えなかった”ら和歌は転生している世界でずっと過ごすことになる。２０年を過ぎてもしお兄さんが見つかっても、お兄さんの記憶は戻せない。でも……」

「でも？」

「でも、それが嫌なら今から願いを破棄(はき)して元の世界へ帰ることも出来るけど、どうする？」

そこまで聞いて、ふっと和歌は息を吐いた。

「行く。行くよ。私は転生を希望する。……でも、お兄ちゃんを“見つけた”って、私に感知とか出来るの？」

「無理。でも、“見つける”の範囲(はんい)は街ですれ違う程度でもいいから、恐らく大丈夫」

「そっか。……もういいよ。転生できる。心の準備は出来た」

「じゃあ、僕がせめて力になれるように、新しい和歌の体に力をいくつか足しておくよ。……そうだ、転生後の希望とかある？名前とか。僕が出来る範囲なら聞くけど……」

和歌は少し考えて、言った。

「うーん、名前は今のまま……苗字は別にいいけど、和歌って名前結構気に入ってるから。あと、転生後は女にしてください。種族は……人族じゃなければいいや。獣人とか亜人とかにもなりたくないけど、人型だといいな。そんなのってある？」

「……うん、あるよ。今丁度いい物が見つかった。この体なら僕が少々祝福を加えたところで砕け散ったりはしないだろうからね」

男の子は笑顔で物々しいことを言った。

「物騒だね……。あ、あと最後に。この胸にある印……闇の神のお

気に入りとか言ったっけ？まあそれの効果とかって何なの？」
　和歌は自分の胸を軽く突きながら言った。
「ああ、それね。それはそのまま闇の神が和歌を気に入ってるって印で、効果としては……闇の魔術とかを使う時に増幅器とか補助とかの役割をしてくれるの。その神の力が大きければ大きいほどその印は大きくなるんだって」

　そこまで言って、気付いたようにはっと顔を上げると、言った。
「そうだ。僕の印もつけとこっと」
　そして男の子は和歌の胸の前でさっと手を横切らせる。
「……今ので付いたの？」
「付いたよ。確認してみて」
　言われて、和歌は自身の服を持ち上げて胸の辺りを見てみた。
　そこには黒い円に重なるように虹色の円より少し大きな四角形が刻まれていた。その四角形の中には瀟洒（しょうしゃ）な紋様が描かれており、それは黒い円と綺麗に合わさっている。

「綺麗。ありがとう」
「いえいえ。僕もこれを刻んだのは初めてだから、どんな効果があるのかは分からないんだけどね。その印たちは刻まれた人が任意で見えなくすることが出来る。見られたくないときは消せばいいよ。……そうだ、向こうの世界に魔法があるとか言ってなかったっけ？」
「ううん、さっきポロっと印の説明の時にこぼしてた。大丈夫、そんなのありがちな異世界だし。……そういえば、言葉って通じるの？」
「うん。通じないと転生の意味ないからね。文字も分かるよ。じゃあ、幸運を祈ってます」
「行って来ます、でいいのかな？」
「いいよ。行ってらっしゃい」

そう言って男の子が手を振ると、和歌の姿はゆっくりと透明になっていった。

第一話　和歌→ワカ（後書き）

説明ばかりですみません

第二話　研究所（前書き）

短めです

第二話　研究所

「〈…ドル…ラ・サム……〉」
何か変な声が和歌をからめ取る。
これは転生中の景色なんだろうか、と和歌は身体を包む網のようなものを不快に思い引きちぎろうとしたが、これも兄に会うためと我慢する。
すると、暗かった周りがどんどん明るくなっていった。

「……ん……」
眩しい光がまぶた越しで伝わって、和歌は目を開けた。
視界がはっきりしない。まるで涙が出ている時みたいだ。
視界をはっきりさせるために和歌は自分の目をこすり、そして起き上がった。

なんだか周りが騒がしい。
何だろうと思って和歌が周りを見回すと、白衣を着て満足そうな顔をしている五人ぐらいの人たちと目が合った。和歌は座っているはずなのに、目線がその人たちより一段高い。
どうやら和歌は少し高めのベッドのようなものに寝かされていたらしい。

「起きたかね、ホムンクルス」
妙なスイッチやボタンやレバーがたくさんある研究所のようなその建物を和歌が物珍しそうに見回していると、白衣のうちのリーダー格のような人が和歌に話しかけてきた。
のは、いいのだが。ホムンクルスって何だホムンクルスって。
「……ホムンクルス？」

和歌は早々に考えることを諦め、おとなしく白衣に訊ねることにした。
そうして出した声に和歌は自分でも驚く。元の自分の声とまるで違うだけでなく、それはとても可愛い声だったから。
「そう。人工生命体の、ホムンクルスだ。詳しくは君の知識の中に入れてあるから、それを確認したまえ」
そう言いながら白衣は和歌の前に一枚の鏡をドンと置いた。
「見たまえ。君の体だ」

えらそうに言う白衣の声が届く前に、言われずとも和歌は新しい自分の姿をまじまじと見つめていた。
そこには三歳ぐらいの幼い女の子がいた。
腰まである長い黒髪に、声通りの可愛い顔。猫のように大きい目は、くりくりとよく動く。試しににこりと笑ってみると、鏡の中の顔も笑った。
「気に入ったかね？」
和歌はうなずいた。それを見てリーダー格以外の白衣が顔を赤くして横を向く。何でだろう。

「お前には成長する知識を入れてある。周りからどんどん吸収するといい。あと体も成長するようにしている。成長速度は人と同じだが、肉体のピークで成長は止まる。そのため老化はしないが、致命傷を負えば簡単に死ぬので注意しろ」
リーダー格の白衣はつらつらとよく回る口で和歌の新しい身体の注意点を述べていく。
「その身体でも立派に魔法を使うことはできるので安心しろ。その他、ホムンクルスの特性故身体を好きなように変えることができる。例えば、犬になる。ゴブリンになる。竜になる。ホムンクルスならば、全て可能だ」
和歌は説明している白衣の口を凝視していた。本当によく動く口

だな。

「スライムになって窓の隙間から逃げ出すこともできる。だがそんなホムンクルスであれど一個体の生命体だから、食事も休養も必要だ。まあ人間等よりはその頻度が少なくて済むが。分かったか？……いや、三歳児程の知識では難しすぎるか。ならもう少し砕いて……」

「いえ、分かりました。十分に」

和歌は白衣に言う、と、白衣の端正な顔が驚いたように歪められた。

そこで和歌は気づく。白衣たちの言う“成長する知識”の最初は三歳児あたりの知識しか持ち合わせていないようだ。確かに今の話は三歳児には到底理解できないだろう。

が、前世の記憶を持ち合わせている和歌には理解できてしまう。

これは隠さないと、と和歌は慌てて言い繕った。

「で、でも、分からないところもあります。もうちょっとかんたんにして下さい」

それを聞いて白衣は安心したようにうなずく。少し子供っぽい口調にしたのも功を奏しているらしい。

助かった、と噛み砕いて説明する白衣を見て和歌はそう思った。

「では、君を買ってくれた人の所へ向かおう」

白衣は締めくくりにそう言った。買ってくれた人、というのはそのままの意味で、ホムンクルスはかなり高価らしい。

和歌を買ったのはある一介の貴族崩れだそうだ。貴族崩れは貴族の地位を色んな理由で剥奪（はくだつ）された人のことを言うらしい。

「そこにある服を着たまえ」

白衣がそう言って指差した和歌の横の木製のカゴには、小さな服が入っていた。そう言われて和歌が自分の身体を見ると、素っ裸。

が、肉体年齢のせいか恥ずかしさは全く感じない。

和歌は言われたとおりそこにあった服を着た。

が、何だろう。この何らかの意図が感じられるような服は。

その服は軍服のような飾り気のないものだったが……黒のニーハイソックスややけに短いスカートなど、製作者の意図が微妙ににじみ出ているような気がしないでもない。

まあいいや、と和歌は白衣に向き直った。

と、白衣が和歌をベッドから抱き上げて地面へ下ろす。

「そこの靴を履け。……履けるか？」

白衣は和歌の足元にあった靴を指差し、その靴のごたごたした装飾を見て和歌に訊ねた。

訊ねるということは三歳児にはこの靴は履けない可能性もあると言うことだ。と和歌は考えて、白衣に言う。

「はけません。むずかしいです」

すると白衣はその靴を履かせてくれた。……うん、なんか優越感。

「歩けるか？」

履かせ終わった後白衣が呟く。和歌はそれにうなずいた。

第二話　研究所（後書き）

11／27　誤字改訂

第三話　街の中で（前書き）

今回も説明ばかりです

第三話　街の中で

「ここがその家だ。君はここで待っていろ」
そう言いながら白衣は馬車を降りて、向こうに見える大きな家へと歩いて行く。
どうやらこの世界には車が無いようで（技術が進歩してるんだかしてないんだか）、例外もあるが地上での移動は主に馬や馬車で行うようだ。
海は帆船、そして空は飛竜、所謂（いわゆる）ドラゴンで移動するらしい。和歌はその異世界テンプレート、竜に会ってみたくなった。
今和歌が乗っているのは国立研究所所有の馬車。国王から直々に下賜されている一等品だが、それでも金属製の車輪で石畳や舗装されていない土の道を走るのだ。和歌は背中や尻に寝違えたような痛みを感じていた。

そんな馬車で５０分も揺られ続け（白衣が御者をしていた）、ようやく止まったのが何かもうこれでもかと言う程大きな屋敷。門の規模からして和歌が縦に三人積み重なっても超えられそうに無い。
そしてその門の美しい金細工の遥か向こうに見えるのは、小さな街一つがその家の規模に相応するのではと言うぐらいの、庭。むしろ庭園。そして屋敷。さすがお貴族様。……いや、今は貴族崩れだったっけ？

しかし、馬車で５０分も走らなければいけない所、今は平民とはいえ貴族崩れが住むのにはあまりにも街外れ。
ここ国の首都の街に限らずこの世界の街という街は、中央に統治者がいてその周りに貴族、その外には貴族崩れと平民、そして最も

街外れに、ある職に就いているものや奴隷が住んでおり、その周りには魔物の侵入を防ぐ壁がある。
街自体がドーナツ状のヒエラルキーなのだ。

それ故、こんな街外れに居を構える貴族崩れがどれだけ珍しいことか。
ちなみに研究所やその他、国直属、つまり国立の公共施設や重要な役割を持っている施設は街のほぼ中央部、国王のいる城のすぐ近くに建てられている。国立病院や、特に大きな商家等はそうだ。
これは重要な施設をまとめて、使いやすくしておく目的の他に、もう一つ理由がある。
王族や貴族が病気になるなどした時に、すぐに治療が出来るよう。物が要り用になった時に、時間を掛けずに手元に届くよう。

庶民は乗り合い馬車位しか乗り物を所有してはいないので、病気になっても街の中心に行くまでに徒歩で二時間も三時間もかかる。たとえ辿り着けたとしても高い高い治療費を払えなければ診てはもらえない。金があったとしても庶民ということで診るのは後回し。診てもらっても庶民なので適当な処置しかしない。
酷いところでは、大怪我をして激痛に気が狂いそうになっている庶民が、貴族の子供の擦り傷より後に回されたということもある。

これが現実。

白衣はそんな酷い酷い現実を馬車に乗っている間、ずっと和歌に話していた。
子供に話すことじゃないだろうと和歌はげんなりしながら聞いていたのだが、なぜ今から貴族崩れのお屋敷に行くのにそんな話をするのかと訊ねたら、予想外の答えが返ってきた。
自分は、元々庶民だったから。

白衣はその高い思考能力を買われて国に拾い上げられた天才だったらしい。
和歌は更に訊ねた。
そんな国を恨んでいるか、と。そんな街に生まれたことが嫌か、と。
御者席で後ろを向いていた白衣は少し驚いた顔で和歌を見た後、ゆっくりとかぶりを振った。
恨んでないよ。だって、この街はだんだん良い方向に向かっているから。
柔らかな笑顔。
答えに今度は和歌が驚いていると、白衣は元のように前を向きながら言った。
前の王様の時は戦争ばっかりだったけど、今の王様になってからは戦争をやめて、僕達庶民も大切にして、街全体がだんだん良い雰囲気になってきてるから。
だから、もう少しこの街で生きてみようかなって思うんだ。

その声はどこまでも優しくて、あの偉そうな口調もどこかに行って。
国立研究所の所長じゃなくて、その時だけ、白衣は一介の庶民だった。

和歌はため息を吐く。
ただ、将来的な問題でもなくて、和歌はこの街で、ゆくゆくは街を出て地球とは違うこの世界で生活するのだ。
この世界の生活は、頭に入っている知識からしても中世ヨーロッパ並み。
魔術のおかげで医学や一部の研究は恐ろしいほど進んでいるが、水道や電気すら通っていない所もある。

せめて自分の身の回りだけは改善しないと、と和歌はぐっと手を握った。

さてさて、そこで真っ先に気にかかるのがこの世界の人たちの髪の毛や目の色である。

赤にピンク、水色にエメラルドグリーンと素晴らしくカラフルなのだ。

馬車についている窓から少しでも痛みを忘れようと和歌はずっと外を眺めていたのだが、さすが異世界である。

腰や背中の痛みは忘れられたが、今度は目が痛くなった所で白衣が説明してくれた。

白衣の話によると、髪の色や目の色は、その人の保有している最も強い属性の魔法を文字通り体現している色だそうだ。赤なら火、茶なら地といった具合に。

また、金色（黄色）には二種類あって、純粋な金色は雷、白に近い金色は光らしい。

そしてそれらは先天性のもので、いくら自分の髪や目の色の属性では無い魔法を多用したところでその色は一生変わることは無いようだ。

そもそも髪の色や目の色は特別な血を受け継いだ王家でも無い限り親から子に遺伝するものではなく、またそれらの効果は微々たる物。

他属性の魔法を使ったところで、日常生活や駆け出しの冒険者のちょっとした手助けになる、という効果ぐらいが限界らしい。

髪と目にそれぞれ違う属性を持っているものも多々いるそうで、赤と青、茶と金のように相反する属性でも同じ人に宿ることはある。その場合、その人はそれらの属性の強化を半分ずつ受け取るそうだ。

また、白金や黒（闇属性）も少ないがいるにはいるらしく、属性による偏見などは無い。

「……お兄ちゃんを見つける前に目が痛すぎて見えなくなるような事が無いといいけど」
本日二度目のため息。を、和歌が吐いたとき。
「絶ッ対、買わんからな！」
と言う男の人の声が聞こえた。
何事かと和歌が馬車の窓から外を覗くが、別段屋敷に何ら変わりは無い。
和歌は頭の中にクエスチョンマークを浮かべながら、元のように座席に戻った。
窓からは日の光が差し込み、のほほんとのどかな時間。
ばたんっ！
は、馬車の扉が乱暴に開けられる音で終了した。
「行くぞ」
そこには、怒った白衣の顔があった。

第三話　街の中で（後書き）

誤字、脱字等あればご指摘ください

第四話　新しい家（前書き）

時間が出来たので連続投稿です

じわじわお気に入りが増えていて嬉しいです

第四話　新しい家

一体何なのー何を怒ってるのー……と、和歌はその白衣の顔を見て一人戦々恐々としていた。何てったって異世界。何が起ころうと和歌の常識では対応できないに決まっている。

「行くと言っているだろう」

白衣はそう言うと、強引に和歌の腕を掴んで馬車から引きずり出した。

「……痛っ……」

和歌はそう呟いたが、ご立腹のご様子な白衣には届いていない。

これが三歳児の身体では無ければ自分はもっと抵抗したんだけどな、と和歌は半分諦めながら白衣に引きずられていった。

「ホムンクルス、いいか？ハバモンド様というこの家にいる男の人のことは“お父様”と呼ぶんだぞ」

「……わかりました」

言いながらも白衣は和歌を引きずるのをやめない。

その状態のまま、和歌は馬車から見たあの金細工（かなざいく）の門を越えて行く。

そこで和歌は、想像とは少し違う庭を見ることになった。

確かに美しいのは美しいのだが、どこかおかしい。

咲いているバラの横に枯れたバラは放置してあるし、雑草もちらほら見える。極めつけは道の真ん中に落ちている枯れて黒ずんだ花。

ここ最近手入れをしていないのだろうか。

自分の足を動かさなくて良い分、和歌は景色を見る余裕と共に頭

の働きも復活させていた。
足はごたごたした余計な飾りの付いた分厚い革のブーツなので別段石畳の上を引きずられていても足が痛くなるような事はないし、体重も軽いので腕も痛くならないし、むしろ馬車よりこっちの方が揺れも少なくて快適かも知れない。
和歌は不自然な花園を通りながら、そう思った。

「お前を連れていたばかりにっ……！」
ハバモンドの屋敷と思しき建物の（何せ大きすぎるので左を見ても右を見てもどこまでが屋敷か分からないのだ）木製の扉の前に和歌を引きずりながら到達したとき、白衣は息を少し上がらせながら、和歌にそう言った。
息が上がるのはしょうがないよね。だって振り向けば霞（かす）んで見えるぐらいに門が遠くに見える。
そこを和歌の重量を引きずってだもの。そりゃあ息も上がるって。

「……ちっ、まあ良い。『絶対に研究所に帰ってくるな』。これは命令だ」
馬車の中の優しさはどこへやら。さも忌々しげに白衣は和歌に命令を下した。
ホムンクルスはその生い立ち故に、自身の製作者と使役者の「命令」には逆らえない。
命令内容を言ったあと、「命令」と言うのが命令発動のキーである。
命令受諾（じゅだく）の印として、和歌の瞳孔が一瞬針のように細くなる。
白衣はそれを確認すると、上がっている息を整えて扉を叩いた。

「ハバモンド様、ハバモンド様！研究所の者です！！」
白衣がそう叫んでから2、3分後。

「だから、私は、そいつを、買わんと！言っているだろう！！」

美形だ――――――――――ッ！！

「……っむぐぅっ！」

和歌は思わず叫びそうになった口を両手で押さえた。

透明感溢れる金色の髪、怒りに震える瞳も金で、透き通るような白い顔はかすかに紅潮している。

ああもうヤバい鼻血出そう。

和歌はついでに鼻まで押さえた。

息　が　出　来　な　い　！

薄れゆく最後の意識で何とか我に返った和歌は、美しいハバモンドの顔にある違和感に気が付いた。

隈が、濃い濃い隈があるのだ。

その隈にかすかな不審感を抱いた和歌は、言い争っている内容にも目を向ける。

「そうは言ってもお代は既に頂いております！」

「だからその金は返してもらわなくても良いからそいつをさっさと処分するなり何なりしてくれ！」

ああ――厄災の種が来た。

和歌はそう思った。

和歌は元の世界で所謂（いわゆる）トラブルメーカーだった。それはどうやらこの世界に来ても変わらないらしい。

元の世界であらゆるトラブルという名のトラブルはあらかた経験済みの和歌だったが、さすがに自分を買った人から拒絶されるというトラブルは元の世界では経験のしようが無い。

よって、対処法は無い。
なら、今から作ればいいだけの事。

和歌はハバモンドの顔に注目し、深く思索した。
（この表情、この弱りきった顔はどこかで見た事があった筈）
（この世界ではそんな表情をしている人は今のところ見ていない）
（なら、前の世界）
和歌はトラブルの経験則と、ホムンクルスの記憶力でトラブルに関する全ての記憶を洗い出す。
（隈……隈に関する記憶）
（寝不足、不調子……憔悴？）
（憔悴、憔悴した記憶）
奥へ奥へと突き進む。
鋭い眼光は、何も見ていないようで見抜いている。
（黒と白……あれは、鯨幕）

（あれは、あれは――）

「何を悲しんでいるの？」
和歌は無意識に声に出していた。
それを聞いてはっとハバモンドが驚いたように和歌を見る。
（見つけた）
「何か悲しい事が……とても悲しい事」
今度は、確信を得たような和歌の声。
和歌は自身を見ているハバモンドの目が揺らいだことを見逃さなかった。
そのハバモンドの様子に、白衣も和歌を見る。こちらは、見下したような目で。

（掴んだ！）

「あったんでしょう？」

そして、ハバモンドの方へ歩きながら。

位置は丁度ハバモンドの真正面。

「でも、もう大丈夫です。お父様」

和歌は、満面の笑顔で言い放った。

瞬間、ふわりと抱きしめられる。

「リズ……！」

視界に溢れる金色を見ながら、和歌は自分の掴んだ解決策が間違っていなかったのを確信した。

「大丈夫、大丈夫です。私はどこにも行きません。だから安心してください」

そして和歌もハバモンドを抱き返す。

和歌の“お父様”が引き金になったのだろう。ハバモンドは静かに涙を流していた。

肩を震わせるハバモンドの金髪から目を離し、和歌は白衣の方をちらと見る。

白衣は驚いた顔で和歌とハバモンドを交互に凝視していた。

その顔はあの優しい白衣。

「……君、は」

口を開きかけた白衣を制すように、和歌は自身の口に人差し指をそっと当てた。

そしてそのまま軽く笑う。

「命令を『解除』する。……君の研究がしたい。近くに来たら寄ってくれ」

参ったなぁ、といった顔で白衣はハバモンドに聞こえないように

そう呟いた。
ホムンクルスの和歌には聞こえる声量で。
私を研究する、か。
和歌は白衣に向かってうなずいた。
この身体が何をできるか知っておかないと。お兄ちゃんが待ってるから。
「それでは私はこれで。お代は既に頂いておりますので」
最後に白衣はハバモンドにそう耳打ちすると、踵（きびす）を返してハバモンド邸から出て行った。

第五話　応接間で（前書き）

三連続投稿

基本は月一更新なので、急に遅くなる事は十分に考えられます

お気に入りに入れて下さってありがとうございます。

モニタの前で悶えてます

第五話　応接間で

思い出したのは、鯨幕。
お葬式の不思議な匂い。

お兄ちゃんが死んだから、私はあんな顔をしていた。

和歌は、応接間と思しき所（広い）でハバモンドと話していた。
「……すまないね、取り乱してしまって」
「いえ、愛する娘様を亡くされたのなら仕方が無いかと」
結局あれからしばらくハバモンドは泣き続けた。
そして泣き止むと、ごしごしと子供っぽく袖で涙を拭い、無言で和歌を家の中へと招き入れた。
これは私を追い出さないと言う事だ、と和歌はハバモンドの表情から勝手に解釈し、招き入れられるままにハバモンド邸に入り……
「あのぉ……、それでですねぇ……」
「ん？……どうした？」
笑顔で訊いてくるハバモンド。
「わ、私をひざの上に乗せたままだと、何かとやりにくいのでは……」

……そう。ハバモンド、あろう事か応接間に入ってきてまず最初に、和歌をひざの上に乗せたのだ。
かちこんと硬直している和歌に言った最初の言葉が、冒頭のあれだったりする。
和歌はトラブルメーカーな体質から緊急用自分を発動し、最初の

受け答えまでは対応できた、の、だが。
先述の通り、和歌はこういう美形やら何やらにとんと耐性が無い、ザ・普通娘だった。
よって緊急用自分もすぐにモーターが焼き切れ、誤作動を起こし、あえなく故障したのである。

「い、いや、何でも……無いです」
「そうかそうか。ホムンクルス、ところで質問だが」
「はい、何でしょうか」
「何故私の娘が死んだ事を知っている？」
一気にハバモンドの纏(まと)う空気が変わる。
ひやり、と冷たい空気。
風も無いのに和歌の髪を揺らしたそれは、音も立てずに和歌の首をゆっくりと締め付ける。

貴族とは皆こうも恐ろしいものなのかと冷や汗を垂らしながら、それでもその気迫に呑まれまいと和歌は振り向き、ハバモンドの顔を真正面から見据えた。
「白衣が教えてくれたのではありません。私が全て推測しました」
「あり得ない」
突然の否定。
「それはあり得ないんだ。ホムンクルスである以上、君は生命活動以外では自分の意思を持たない筈だから」

ぐっと詰まる息。
増した迫力。
言外に伝わるのは、「本当の事を言え」という半強制的なメッセージ。
「っ……く……」
使役者なんだから命令すれば済むことなのに、こんな手段を使っ

てくる。
それでいて顔はまだあの爽やかな笑顔。
「私は元々人間でしたっ！！」
和歌は叫んだ。
トラブルメーカーで、常に騒動の中心にいた彼女にはいつも半分嘘を交えて喋る癖があった。
それはつまり一定の距離以上に自分に他人を近づかせないための防衛策。
トラブルから身を守るための生き方が、この男には通用しない。
死にそうなほどの閉塞感から脱け出して、和歌は思い出したように肩で息をした。
気が付いたらほおが涙で濡れていた。
「はい、よく言えました」
そうして泣き出した和歌を、ハバモンドはまるで娘でもあやすかのようによしよしと頭を撫でる。
「……信じて……くれるんですか？」
「本当の事だからね」
和歌は涙で濡れた目を丸くした。
こんな突拍子も無い話、信じてもらえると思わなかった。
「じゃあそんな大切な事を教えてくれた君に、私もひとつ大切な事を教えよう」
ハバモンドは、和歌の耳にやっと届くぐらいの小さな声で、囁（ささや）いた。
「私は、魔法が使えないんだ」
「……えっ？」

和歌が告げられた内容に驚いてハバモンドの顔を見ると、ハバモンドは笑いながら自身の唇に人差し指を当てた。
「神様の呪いのような祝福でね。……秘密だよ。これはお隣さんと王様とその側近しか知らないから」
そしてハバモンドは優しく和歌に提案する。
「ときに、私の娘にならないかい？」
「ふぅえええええええええぇぇぇぇぇっ？！」

こうして、和歌のハバモンド家入りが決定した。

「ところで、何故私が娘を亡くしたのか分かったんだい？」
「……お父様が、私が兄を亡くしたときと同じ顔をしていたからです。私はこの世界に兄を探すために転生してきましたから」
「ふむ。……その兄を探すためというのはどういうことだ？」
和歌は視界の後ろに金色を感じながら答える。
「お願いしたんです。流星群に。兄に会いたいって」
「それで転生か」
「そうです。神様に転生させてもらって。でも、兄はこの世界に既に転生した後で」
「そして、兄を探せと？随分適当な神だな」
「いいえ、それが限界らしいです。ひとりに干渉するのは。でも、兄は普通に転生したから記憶も何も無くて、性別も分からなくて、どの種族かも分からないし、もしかしたら道端の雑草かもしれない」
「ほう……。期間はいつまでなんだ？」
「２０年。ここに着いてから丁度２０年間らしいです。世界を回ろうとしたら短いけど、すれ違う程度でも良いって。だから、きっと見つかる気がします。いいえ、見つけてみせます。絶対に」

和歌は真摯（しんし）な目つきでハバモンド邸応接間の床を見つめる。
まるでそこに兄がいるかのような真剣さで。

「それなら尚更（なおさら）早く世界を回らねばならないな。……そうだ、名前を聞いていなかった。君は何と言う名前だったんだい？」
「和歌です。森本和歌。和歌が名前で、森本が姓」
「では和歌、戸籍を作りに早速王城へ行こう」
「はい？」
ハバモンドの声は、至極（しごく）真剣だった。

第五話　応接間で（後書き）

誤字・脱字等あればご指摘ください

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8654x/

黒髪のホムンクルス

2011年12月11日13時49分発行